

入選

テーマ：誰かのために、わたしができること 「人と人とのあいさつが生み出す魔法」

千葉県・八千代松陰高等学校3年 井上浩幸

今日の日本では、少子化が問題となっている。そして、超高齢社会。団塊の世代が七五歳を迎える二〇二五年問題が、間近である。このような時代に生きる私達だからこそ、できることがあるのではないだろうか。

私は、築二〇年の集合住宅に住んでいる。一〇年前までは、団地内の至る所で赤ちゃんや幼児の遊ぶ声が聞こえてきたものだった。しかし、その世代が街を離れたり、高校生となった今では、その頃の元気な声はほとんど聞こえなくなってしまった。子供達の減少と同時に、高齢者世帯も増加。老老介護をしていたり、独りで住む高齢者もいる。団地内で「顔の見えるお付き合い」が少なくなっている今日だからこそ、できることがある。

それは、あいさつだ。毎日、近所の人と会ったら「おはようございます。今日も暑いですね」。そんな何気ないことでもいい。あいさつをすることで、互いを認め合い、互いの距離が縮まるきっかけとなるのだ。ところで、私は収集日には、必ずゴミ出しをしている。集積所では、自分からあいさつをしている。最初は、あいさつをしたからといって、全ての人があいさつを返してくれたわけではなかった。しかし、続けたことで、自然と相手も笑顔であいさつを返してくれるようになった。

実際にこの経験が、震災の時にも役立った。私は、当時団地内にいた人達と共に、高齢者の安否確認のお手伝いという、私にとつて貴重な体験をさせてもらうことができた。また、昨年関東地方を襲った大雪の時、私も住民の一人として雪かきに参加した。私にとっては、ごく当たり前のことで自然に身についてきたあいさつが、非常時には、こんなに重要であることにも驚いた。

これは、団地内だけの話ではない。私の母は、私の母校である地元

の小学校で週一回、登校指導を行っている。今年で登校指導を始めて八年となる。母は、いつも大きな声で「おはよう！」と、あいさつをしている。小学校には、特別支援学級に通っている子供もいる。最初の頃その子は、母の大きな声のあいさつに驚いたり、落ち着きがなかったという。しかし、時がたつにつれて、母の目を見て元気よくあいさつをし、学校でも落ち着いて過ごしているそうだ。また、ある日、母がいつものように登校指導を行っているとき、ある小学生に「いつもありがとうございます」と言われたこともあったという。私は、この話を聞いてとても感動した。以上の実例からも、あいさつは、続けることで魔法のように、人と人との距離を縮めることへのきっかけとなり、非常時には人の生命を守るものへと変化していくものなのだ。

現在は、設置構想中であるが、人と人との心の距離を縮めるためのきっかけづくりの取り組みを紹介しよう。千葉県柏市に豊四季台団地という団地がある。一九六四年に入居が始まったが、近年は急速な高齢化が進んでいる。幅広い世代が共に住めるような環境づくりの一つとして、誰もが利用できるコミュニティカフェを作るという構想がある。実現すれば、いろいろな世代が交流できる「きっかけ」づくりの場となるだろう。

近年では、生活環境も一〇年前とは大きく異なっている。それによって、人と人との付き合い方も大きく変化しているように思われる。このままでは、非常時であっても、お互いを知らないままでは助け出すこともできないだろう。だからこそ、あいさつがとても大切なこととなってくるのである。人と人との距離が縮まれば、自然と何かあった時でも、お互いに助け合うことが可能になってくるだろう。あいさつをされて、うれしくない人はいないはずだ。

さあ、続けることで心の距離を縮め、自分も相手も笑顔になるような魔法をかけよう。今日も元気に「おはようございますー」と。